

平和と友情の21世紀を築こう

Vol. 65

会 報



公益財団法人 松前国際友好財団

2015.4.1



松前国際友好財団創立35周年記念シンポジウム

学術および科学・技術研究者の国際的人材育成と
国際交流による世界平和を願って

(松前国際友好財団のこれまでとこれから)

公益財団法人松前国際友好財団は、松前重義博士（学校法人東海大学創立者）により1979年6月に設立されました。この度本財団創立35周年を記念し、シンポジウムが1月25日東海大学校友会館（東京都千代田区／霞が関ビル35階）にて開催されました。

内田裕久本財団理事長より「松前国際友好財団」についての紹介があり、続いて、第1部として、本財団がこれまでに招聘した112

カ国721名の中から選ばれた3名の外国人研究者による招待講演「招聘研究者の自国での活躍—自らの体験を通じた人材育成—」がそれぞれ行われ、第2部は、3名のパネリストによる「科学・技術分野での人材育成と国際交流」をテーマとする講演と総合討論が行われました。進行は本財団評議員松前光紀氏および佐々木政子氏が務めました。また当日は日曜の午後にもかかわらず、多数の聴講者がありました。

松前国際友好財団創立35周年記念シンポジウム

理事長講演 (要約)

松前国際友好財団について

理事長 内田 裕久

本日はこの財団をつくられた松前重義博士の考え方と思想、なぜこの財団をつくったのかを財団の現状とともにお話したいと思えます。

まず、今皆さんは普通に電話機をお使いになっています。「もしもし」と言ったときに、すぐに相手からの反応がくる、この電話通信技術を確立させた通信ケーブルを、松前重義博士が発明することにより、これがその後の世界標準のケーブルにもなっていました。またそのときに出た学会からの奨学金で小さな私塾、望星学塾を開設しました。これが現在の東海大学の基になっています。

松前重義博士はデンマークのグルントヴィ博士の考え方に非常に強く影響をされました。デンマークという国は一時期とても大きな国だったのですが、戦争を繰り返す中で小さくなっていきました。恵まれない土地の中でも今のような素晴らしい立派な国になったのは、ひとえに国民の教育がしっかり行われたからであるという確信を持った松前重義博士は、非常に感銘を受けました。そうして人材育成の教育のための教育機関をつくろうと決め、東海大学の設立につながってまいりました。東海大学の校旗にある白いクロスは、キリスト教の白いクロスにも対応しています。横の愛と縦の正義という2つのクロス、ここに真理があるという考え方で、東海大学の教育の原点は人間と科学技術の調和に根差しているということです。現在、東海大学は約3万人の学生を抱えています。その他に短期大学、



高等学校、中学校、小学校、幼稚園、付属大学病院、そして研究センターを運営しています。

それでは、松前重義博士がどうして、この松前国際友好財団を設立したかというところに触れてみたいと思います。1941年、日本は太平洋戦争が始まるきっかけとなったハワイのパールハーバーに攻撃を仕掛けました。すでに松前重義博士は逡信省の役人で工務局長という立場にもありました。この無謀な戦争に対して開戦にも反対し、高松宮殿下とともに非常に強く働きかけをしましたが、当時の東条英機内閣の中での立場は非常に大変な状況におかれ、40歳を過ぎた理工系の官僚でしたが、二等兵として南の前線に送られたわけです。

1945年に日本は終戦を迎えます。松前重義博士は南方の前線に送られたものの何とか生き延びて帰ってこられ、その後も政府の要職に就きました。終戦時に広島原爆調査団長として報告書をまとめたときには、「新型爆弾など書くと日本人は最後まで戦う意欲をなくしてしまう」という軍部に対しても、「自分たちの目で、あの悲惨な広島現状を見てこい」と追い返したという話があります。

無謀な戦争に対して、しっかりと反戦を唱え、命をかけて戦ってきたのです。

第二次大戦後、松前重義博士は、まさに平和を目指した行動をとります。1つは国会議員として、また1科学者としての行動です。1955年には原子力基本法を制定、さらに翌年には日本で初めて東海大学に原子力工学専攻をつくりました。1959年には科学技術省設立に尽力しました。これは元はと言えば原子力を平和に利用しようという目的でつくられた国の機関でもありました。そして1958年、多重放送という形ではFM放送が初めて日本で実用化しました。この実験放送局だったラジオ放送局「FM東海」は、1970年には現在の「東京FM」としてさらに大きく成長しています。

このような平和に対しての松前重義博士の行動を考えると、東西冷戦時代に東海大学の湘南校舎が非常に特別な場所だったことがあげられます。例えば、旧ソビエト連邦の研究者、あるいは東欧諸国の研究者・学生諸君が唯一滞在できる場所、それが湘南校舎でした。東西冷戦という非常に難しい状況下でも世界平和を目指すためには、両方のコネクションをとっていく必要があるということで、非常に尽力をされたのです。2009年にロシアのプーチン大統領が来日されたときには、東海大学の名誉学位をお渡ししました。プーチン大統領は柔道に非常に長けており、この柔道の心という点に注目をしての学位授与となりました。

松前重義博士が平和を目指し、いろいろなレベルで、いろいろな活動をされている中で松前国際友好財団が1979年に設立されました。まさにこの財団のできた創立の精神は、世界平和をつくっていくためにはお互いの相互理解を促進しながら、日本と他国の間の理解を深めていこうというものなのです。

1980年から活動を開始して、毎年20名から30名の奨学者、研究者を日本に6カ月ほ

どお招きしてまいりました。現在、721名の研究者の方々を112カ国から日本に招聘しています。招聘した研究者の方々は、北は北海道から、南は九州、沖縄まで全国の大学研究機関に滞在され、60%が国立大学、30%が私立大学、10%がその他の国公立民間の研究所となっています。応募されてくる方々の男女比率では、圧倒的に男性の方が多いものの採択率で見ると、最近では女性の採択率が非常に高くなってきています。積極的に海外に行くという、特に外国から見れば、日本に行って研究をしようという女性が増えてきたということだと考えられます。そうして厳密な審査により選ばれた方々が日本に到着すると、財団のスタッフが空港に出迎えに行き、日本での生活をスタートするためのいろいろなガイダンスをずっと続けてきているわけです。

滞在が終わり帰国のときには、皆さんがまたお国に戻って、しっかりといろいろな活動を展開していただきたいという願いを込めて、修了証書を事務所でお渡ししています。同時に再来日される方々へのケア等も行っています。またこれらの活動の様子は、財団の「会報」や英語版の「ニュースレター」、「研究紀要」あるいは「奨学者名簿」で発表をしています。

私どもは研究者の交流、人的ないろいろなコネクションをつくり、またさらにそれを広げていく活動を通して松前博士が残されていた言葉、あるいは創立の精神をしっかりと受け止めて前進していきたいと思っています。特にいろいろな国の政治的なバリアがありますが、それも乗り越えていくというのが創立者の姿勢でした。現在のこの活動を世界中に広げて、より多くの研究者の方々が私どもの財団を利用し、日本にもっと来ていただけるよう、そして相互理解をより深めていきたいと考えている次第です。

以上で私の挨拶とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

成功と好機を持たらず 松前国際友好財団

リシャルド・ゴレツキ教授

(Dr. Ryszard GORECKI)

ヴァルミア・マズーリィ大学学長
ポーランド共和国上院議員



リシャルド・ゴレツキ博士は、ポーランド共和国ヴァルミア・マズーリィ大学学長・教授。1988年9月から1989年2月にかけて松前国際友好財団の招聘で来日され、東北大学教養部生物学科・江刺洋司教授の下で「種子の生理学」について6カ月間研究活動を展開、現在母国で上院議員としても活躍されています。

創立35周年の記念シンポジウムにお招きいただきありがとうございます。日本には25年以上前に日出ずる国として初めて松前国際友好財団から招聘を受けて日本に訪れたときから魅了されています。興味深いことに私が滞在した期間は、招聘研究者の中でヨーロッパ出身は私一人で、共産主義の東ヨーロッパから参加したのは私が最初でした。

ヨハネ・パウロ2世はポーランド出身ですが「将来は今日から始まる。明日からではない」という言葉を残しています。それがまさに1988年9月の私にとってもそうでした。科学の未来が私にとって始まったのは、日本での、ある美しい日のことでした。

私は東北大学の江刺洋司教授の下で、大変素晴らしい時期を過ごすことができ、非常に多くの良い研究を進めることができました。科学者としてのキャリア、それから公務に就く上でも大きな影響を受けることになりました。

そうして日本での経験により、ダイナミックに研究を展開できたおかげで1993年には、当時のレフ・ワレサ大統領より任命され、オルシュティン大学に最も若い教授の1人として就任しました。大統領は「ポーランドは第2の日本になるべきだ」とよく言っておられました。

1999年にはヴァルミア・マズーリィ大学が設立され、初代学長として就任しました。その間に大学として大きな進捗を遂げること

ができ、9つの学部を新たにつくることができました。ポーランドでは最も設立から年が浅い大学ですが、現在は2万8,000人の学生が65の研究分野で勉強をしています。コルトボーキャンパスは、ポーランドでも最も美しい大学キャンパスの1つです。

私は科学者としてのキャリアだけではなくその一方で公務にもかかわっています。2008年からはポーランド上院議員を務めています。ポーランド日本議員連盟のメンバーにもなっており、今の駐ポーランド日本大使とも密にコンタクトをとらせていただいています。日本とポーランドとの協力交流に幅広くかかわることで、日本でも評価をいただき、2014年には日本とポーランドの相互理解を促進し貢献したこと、また議員として科学者として2国間協力を強化したことについて、日本政府から旭日重光章を授与されました。

このような榮譽に浴することは、松前財団の招聘研究者としての経験がなければなかったであろうということを、式典に出席した多くの人たちに伝えることができました。また2国間協力についてのさらなる強化を約束し、日本に対する感謝の恩返しをしたいと思っています。そして社会的にも経済的にも、あらゆる分野で日本とポーランドはより近い関係

になることを願っています。

さて、本日のシンポジウムのテーマ、つまり将来の人材を育成していくことは重要だと考えています。現代の大学そして研究所は、科学研究という意味でも教育を行っていくという意味でも、また教員の人材の開発という意味でも国際化していかなければなりません。そして効率よく世界的な経済発展、科学とつながっていくことが重要です。松前財団がこのように若手の研究者を招聘し、機会を与えてくださり、開発支援を必要とするような国の研究者を招聘して下さっていることは、大変喜ばしいことだと感じています。

現在、世界は数多くの問題や課題に直面しており、人の健康、安全などの問題に対処することが中でも重要な任務であると考えています。そして新しく民主国家として発展している、例えば、アフリカや中東欧諸国に対しての経済的な支援、社会的な支援を財団がして下さっていることは大変重要です。

また、国の中には環境の劣化にかかわる犯罪の問題を抱えている国があります。そのためにグリーン犯罪学という、日本で展開されている学問が役に立つと思います。オルシュティン近くのピャウイストクの大学と、ヴァルミア・マズーリィ大学では、共同で日本法センターを開設することになっています。現在ポーランドには、ヨーロッパ法、アメリカ法、フランス法、ロシア法、中国法の法律センターがありますが、オルシュティンには日本の法律センターがありませんので、自分たちで設立しようということにしました。

松前財団が果たされた素晴らしい業績について一言申し上げたいと思います。松前財団の親愛なる友人の方々は、35年前に大いなる挑戦の旅を始めました。それは世界が危機に直面している時期でしたが、そういった時期にも躊躇することなく共産圏からも若い研究者を招聘して下さいました。そしてできる限り環境を整えて受け入れ、真理探究のた

めのスキルを磨くことを可能としてくれました。世界の中の最も複雑な問題についても科学に限りませんが、真理の探究の支援をして下さっています。真理への道のりを表す言葉は「わからない、アイトントノウ」という言葉です。ポーランド人のノーベル賞受賞者の詩人、ヴィスワヴァ・シンボルスカは受賞演説で「どのような知識も新しい疑問に結びつかない知識は、すぐになくなってしまう。そして、温度がある程度維持されなければ生命を維持することはできない。そして、極端な場合には古代から現代史にいたるまで知られていることであっても、十分に理解をされておらず社会にとって致命的な勢いとなることがある」と言っています。

この言葉を引用することにより財団のご支援に感謝を申し上げたいと思います。そして財団の親愛なるメンバーの方々、若い科学者たちがその知識をより広げて、科学的な手法により真理を探究することの支援をぜひ続けていただきたいと思います。「わからない、アイトントノウ」という言葉に対しての答えを求めることを支援していただきたいと思います。また世界中の若い招聘研究者たちが、その支援を受け情熱的な研究者として答えを見つけていくことができることを願っています。若い研究者には、ぜひ世界中のすべての大学の相互の便益、そして福祉のために研究をしていただきたいと思います。

最後にヴァルミア・マズーリィ大学を代表して、内田裕久教授に御礼申し上げます。東海大学教授、そして財団理事長の内田裕久様に対して、私どもの大学からの感謝の意を表明して締めくくりたいと思います。



ヴァルミア・マズーリィ大学
キャンパス

リーダーとなる人材開発における挑戦とチャンス

シャウカト・アリ・
アブドゥルラザク教授
(Dr. Shaukat Ali ABDULRAZAK)
ケニア共和国ウンマ大学副学長

まずこの創立35周年記念のシンポジウムを準備された皆様へ、私をご招待いただき、お話しする機会をいただいたことにお礼申し上げます。

今日は、ケニア大使館の参事官も出席しています。また、妻とも一緒に来日しています。まず簡単に自己紹介を申し上げます。私は1964年生まれのケニア人で、ケニアの教育を受けて大学に行き、英国に渡り1995年に31歳で博士号を取得しました。

私が博士課程 (Ph.D.) で英国のアバディーン大学にいたときに、初めて島根大学の藤原先生とお会いしました。その後、Ph.D.が終わりつつあるときに藤原先生と再会して松前財団へ応募するように紹介されました。そうして1998年に島根大学に行き6カ月間、藤原先生の下で動物科学の研究をしていましたが、島根大学に行ったことから多くのことが始まりました。

日本にいた頃、日本人は勤勉だということを学びました。そして、アバディーンにいた時とは比べられないほど、もっと日本で一生懸命勉強しなければいけないと思いました。藤原先生はそれを大変喜んでいました。

松前財団の支援の下で研究をしながら、いろいろなチャンスが生まれました。帰国後はエガートン大学の教授に就任、5年間の副学長を務め、政府でさまざまな役割も果たしました。例えば、ケニアの政府委員になり、ま



シャウカト・アリ・アブドゥルラザク博士は、ケニア共和国ウンマ大学副学長・教授。1998年6月から12月にかけて松前国際友好財団の招聘で来日し、島根大学生物資源科学部農業生産学科・藤原勉教授の下で、「木本マメ科の樹葉等の家畜飼料の活用評価」について6カ月間研究滞在をされています。博士は日本語のスピーチ能力をずっとキープされており、機会があるごとに母国で日本人と接して交流を深めています。

たケニアの海洋研究所のメンバーにもなりました。さらにはケニア政府から国家経済社会理事会のメンバーに任命され、内閣に対して科学技術の助言を与えることにもなりました。

また6つの国際的なジャーナルの編集員として、さまざまな博士号や修士号の監督をし、エグザミネーター、6つの機関のフェローにもなりました。現在、私は松前国際友好財団のフェローとして旅を始めてから、すでに100以上の国際的に申請されている論文を発表しました。

松前国際友好財団はさまざまな国際的なフェローを育てていきます。私もその恩恵を受けることができた1人です。より多くの国際的なフェローが松前国際友好財団を通して増えることを祈っています。これは大変大事なことだと思います。そこでいくつかお話ししたいことがあります。

人材開発は重要で、競争力のある人材が必要です。そうすることでそれぞれの国をつくっていくわけです。そして結果も必要ですので私のやることは質が高く、迅速に市場のニーズに応えなければなりません。さらに、世界のイノベーションによるチャレンジを見極めなければなりません。つまりチャレンジを

特定しそれに対する解決を見つけなければなりません。日本の研究室で研究をしているときに、常に問題が何であるのか、そしてどういう解決があるのかを議論しました。その中で不可能は可能になりうることを学びました。見て刺激を受け、創造性と今までの概念を飛び越えて考えることで多くのことが実現できました。それが松前先生の夢でした。

また私たちは革新（新しい物事）を作っていく中で、何よりも動機づけが大事です。日本では小さなことを実現すると皆さんがいつもお祝いしました。コミュニケーションをとることやチームワークの精神とともに、縦割りの考え方を乗り越えて一緒に仕事をしなければいけないということです。そして多くのことをシンクロさせて、共通の目的を達成するためには相乗効果も必要です。しかし、一番は変革のできるリーダーでなければならぬこと。どのように変革を遂げることができるかを学び、ビジョンを持つということです。松前先生から学びました。彼もビジョンのあるリーダーでした。小学校、高校、大学、財団へとつなげていきました。

物事をやる上で何が大事なのかは、行ったことをチェックすることとそれに対して行動して、自習をする必要があることです。「たくさん話すが、あまり実行しない」、これは途上国で常に直面している課題です。そして同じ目的を共有する人をまわりに置く必要があるということです。そうでないと始めることはできません。藤原先生からは常に、非常に熱心にビジョンある人たちを紹介されました。そうした中で、指導とサポートをすることが大事です。

タイ・ハワードの言葉ですが、「批判や支持者、失敗、大小の勝利の真っただ中でも、ひるまず成功を求めることを学ばない限り、偉大なリーダーとして人は行動をとることができない」、これは私たちが常に考えていることです。



ウンマ大学のスタッフと生徒たち

では最後に簡単にウンマ大学のことを紹介したいと思います。ウンマ大学は、初めてイスラム系の大学でありながら、イスラム教徒でもイスラム教徒でない人も、またケニア人でなくても入学が許されている大学です。経営学とコンピュータ科学、イスラミック法典、イスラム研究の4つのコースがありますが、他のコースも始めたいと思っています。現在370人の学生がいます。これから3年でこの10倍の3,000人以上には増やしたいと思っています。

藤原先生は引退されて今はフィリピンにおられます。しかし55歳から60歳の間の日本の方は引退されてもまだ若くて元気ですので、ぜひウンマ大学にいらしてください。皆様いろいろなチャンスを提供できます。

最後になりましたが、さらに皆様と松前国際友好財団にお礼を申し上げたいと思います。さまざまなパートナーシップがケニアと日本の間にあります。また私は現在、日本学術振興会（JSPS）の名誉会員としてJSPSの東アフリカ協会を始めましたので、東アフリカの松前国際友好財団の協会を、私の地域でも設立したいと思っています。そしてこのようなシンポジウムを将来アフリカで開催し、ぜひケニアで皆さんをお迎えしたいと思っています。

どうもありがとうございました。

ウズベキスタンと日本両国の 物理学者の協力・発展に寄与する 松前国際友好財団の役割

ダブロンベク・マトラスロフ博士

(Dr. Davronbek MATRASULOV)

ウズベキスタン共和国トリノ工科大学タシケント校
最先端研究革新センター長

松前国際友好財団には長きにわたるご協力と、またこのシンポジウムにお招きくださったことに御礼申し上げたいと思います。

招聘研究者として4カ月滞在した後、母国に戻ってからの状況についてお話しいたしますが、日本に滞在したことの影響がどれほど大きかったのかを振り返ることにもなります。

私の国、ウズベキスタンは中央アジアにあります。場所はシルクロードの真ん中ぐらいで、中央アジアの中でも中心部に位置しています。古代からの歴史があり、文化的にも大きな貢献をしています。歴史的な名所はユネスコの世界遺産にもなっています。

私が所属する2つの大学のうち、トリノ工科大学はイタリアのトリノ工科大学の系列大学です。機械工学、エネルギー、情報技術、土木工学の4つの学部があり、研究機関についてはテクノパーク、地震工学研究センター、最先端研究革新センター、機械電子工学センター、計測学センターがあります。その中の



最先端研究革新センターのメンバー



ダブロンベク・マトラスロフ博士は、ウズベキスタン共和国トリノ工科大学タシケント校最先端研究革新センター長をされており、2003年9月から翌年1月にかけて松前国際友好財団の招聘で来日されました。東海大学理学部物理学科・豊田正教授の下で「ケプラー運動相対性理論によるCoherent States」について4カ月間研究をされました。

最先端研究革新センターは10年以上前に設立されましたが、ウズベキスタンの科学アカデミーにいた頃の活動の一環として私が設立したものです。

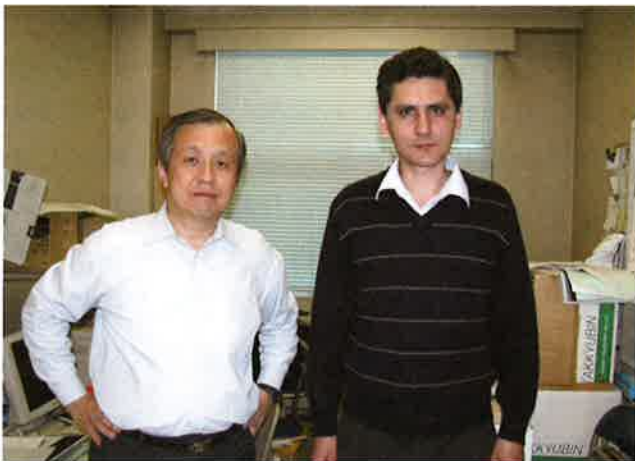
私は1999年に一番若い年齢で正教授に任命されました。そしてその後いろいろな国を訪れました。カナダの次に訪れた外国は日本で、日本の受け入れ先となってくださった東海大学理学部物理学科・豊田正教授には、カナダ滞在中にお会いし、日本に来る前から協力関係が始まりました。研究分野は、低次元ナノスケールシステム非線形量子カオス理論、複雑系物理学、数理物理学、量子情報科学です。

また、私がかかわっているもう1つの大学はウズベキスタン国立大学です。ウズベキスタンで最大規模の大学で以前はタシケント大学と呼ばれていました。私は先端材料研究所を率いており、光起電性の材料、ナノ材料、ポリマーの研究、柔らかい凝縮物質の研究、計算材料学といった分野の研究を行っています。

松前財団との関係についてですが、私は2003年に招聘研究者として日本を訪問して、4カ月東海大学湘南キャンパスに滞在しました。日本を訪問するのはこのときが初めてで

した。そしてこの滞在期間中にいくつもの大変重要な刺激を受け、物理学・数学の分野で日本とウズベキスタンとの協力の土台をつくることができました。

研修期間中には、招聘研究者とのミーティングがあり、短いプレゼンテーションや研修旅行など重要な経験をしました。東海大学での環境も大変素晴らしく、豊田正先生には特に感謝しています。環境を整えてくださり、より多く日本文化について学ぶことができるようにしてくれました。そのおかげで日本文化、歴史、伝統について知ることができ、日本の方たちについても理解することができました。そしてこれは日本との協力が、私の外国との協力においては最優先になるという重要な決断を下すことにつながりました。



母国に戻ってからは、松前財団のプログラムについて、学術コミュニティに広く知らしめようと努力をしています。その結果、私のグループからも松前財団のフェローシップに、過去10年間で3人が選ばれました。そして私ももう一度日本を訪問したいと、日本学術振興会のフェローシップを受け、2005年に大阪市立大学に2カ月間滞在しました。また定期的に日本ウズベクワークショップを開催し、フェローアップとしてはウズベキスタンで私のグループが共同研究を行っています。

日本滞在後の活動については、このようにまとめることができますと思います。いくつかの方向性がありますが、そのほかに日本学術

振興会に対して提案中のものを含めてのジョイントプロジェクトや、共同の会議なども行っており、50人以上の日本の物理学の方々が訪問してくださっています。そのうち80%が若手研究者の方です。それから、再生利用エネルギー、地震学、地震工学や耐震工学分野での共同研究を行っています。また、我々の最先端研究革新センターは日本の6つの大学と協力関係があります。共同研究論文をジャーナルに発表するなどの実際の成果も出ており、松前財団で招聘を受けて日本で滞在をすることができたおかげで、このような共同プロジェクトを行うことができます。

今年は3つの提案を行うことにしています。さらなるジョイントワークショップ、それから学生ポスドクの交流、そして科学技術振興機構、日本学術振興会、松前財団、ウズベキスタンの科学技術庁との協力を支援していきたいと考えています。またそのような取り組みの中で、ウズベキスタンの若手研究者が、松前財団のフェローシップにより多く応募することを願っています。

野心的な計画も立てています。1つに日本の大学支部をウズベキスタンに設けることであるとか、日本の研究センターを設置するということです。韓国、イタリアの大学、イギリスの一部の大学は、ウズベキスタンに支部があり、そのような協力は日本ともできればと願っています。

もう1つは、松前財団の同窓生ミーティングをウズベキスタンで開催することです。非常に効果的に生産的な形で、日本の研究者の方々と協力をするのができたのも松前財団のおかげです。また今年はさらに3人が、ウズベキスタンから松前財団のフェローシップの下、日本を訪れることになっています。

以上が短い報告でしたが、これはいかに松前財団が必要とされているかの証ですし、大変効果的なプログラムであることの証です。

どうもありがとうございました。

研究人材育成と国際交流

片岡 洋 氏

文部科学省科学技術・学術政策局
人材政策課長

本日は創立35周年記念というおめでたいシンポジウムにお招きいただきありがとうございます。

最初の内田理事長のお話、それから実際にプログラムで日本に招聘された3人の皆様のご活躍されている素晴らしいお話を伺わせていただきました。大変感銘を受けました。

文部科学省の取り組み状況をお話しさせていただきます。文部科学省は英語の名前が「ミニストリー・オブ・エデュケーション・カルチャー・スポーツ・サイエンス・アンド・テクノロジー」と非常に長いのです。名前のおり非常に幅広い分野、教育、文化、スポーツ、科学技術という分野を担当しています。

科学技術に関係している局は3つあります。その中の1つ、科学技術・学術政策局というところに私はいます。科学技術の基本的な政策の企画立案や、産学連携、国際協力を担当しています。それとともに人材育成を行っています。

私のいる人材政策課は、英語では「ナレッジ・インフラストラクチャー・ポリシー・ディビジョン」といい、あまり人材を連想させない名前ですが、人材、若手研究者の育成、次世代の人材育成、それからJST（独立行政法人の科学技術振興機構）全体の予算などを担当している課です。

私どもの課でやっているもの以外も含め、文部科学省で行っている人材育成の取り組みについては、中学・高校レベル、大学・大学院レベル、ポスドク・研究者のレベルでさま



ざまな政策を行っています。例えば、若手研究者等の育成・活躍促進では、若手研究者の流動化、キャリアパスの多様化のための政策である、科学技術人材育成のコンソーシアムの構築という制度を行っています。これは今年、平成26年度からスタートした事業ですが、複数の大学や研究機関等でコンソーシアムを形成して、企業等とも連携して若手研究者の流動性を高めつつ、安定的な雇用を確保しながらキャリアアップを図る仕組みを構築する、そういった取り組みを行うコンソーシアムを支援するものです。今年度は7拠点採択しています。来年度も数拠点、新規採択できる予算が確保できたところです。

それから、研究者とは少し違うのですが、プログラム・マネージャーという、研究開発のプログラムをマネージする人材の育成を行うプログラムを、新規に来年度から行っているところでは、

優秀な若手研究者の自立的な研究環境の整備では、テニュアトラックの普及・定着事業を以前から行っています。大学改革などの一環でテニュアトラック制を活用し、優秀な研究者を採用する大学等を支援していくものです。今年度、26年度は新規に採択できる予算がとれなかったのですが、27年度については新しい採択ができる予算も確保しています。

そして特別研究員事業がありますが、実施

しているのは日本学術振興会、JSPSが行っている事業です。ドクターコースの学生やポストドクターに対するフェローシップのプログラムです。

女性研究者の活躍促進のための事業もあります。安倍内閣の重要課題で女性の活躍を促進することがいわれていますが、ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブといい、研究と出産・育児・介護等との両立や女性研究者の研究力向上を目的に、ダイバーシティ実現を支援していきます。予算の方も少し増額する状況になっています。

また特別研究員の中でRPDというものがあります。これは女性の方が出産・育児により研究を中断したあとにリスタートするための支援の事業です。これについても予算をかなり増額し、女性支援を手厚くしている状況です。その他、中高生レベルの理系進路選択支援プログラムもあります。

高校生レベルでは、スーパーサイエンスハイスクールの支援をはじめ、国際科学技術コンテストや科学の甲子園、そういった事業も行っているところです。

一方で検討中の制度には、卓越研究員制度というものがあります。これは若い研究者のポストが減り、任期付きの研究者が増えて雇用が安定しない状況が増してきていることから検討しています。優秀な若い方が研究者職に魅力を感じずに、例えば修士課程を修了してドクターコースに行かないで企業に就職してしまう状況があるということです。そういうことにならないように若い方に対して研究職というものが、非常に魅力的なキャリアになるよう考えているものです。優れた研究者を「卓越研究員」として選定して、産学官の枠を超えて、独創的な研究に専念できるような新たな制度を創設し、大学改革とか研究資金の改革と併せて行っていければと、今、検討をまさに始めようとしている制度です。

次に、国際協力の中身については、国際的

な人材・研究ネットワークの強化、科学技術外交の基盤の整備ということで、1つは大学などの研究機関への支援で、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進事業というものを行っています。これは我が国の高いポテンシャルを有する研究グループが特定の研究領域で研究ネットワークを戦略的に形成するために、海外のトップクラスの研究機関と研究者の派遣・受け入れを行う大学などの研究機関を重点的に支援する制度です。それから研究者個人への支援ということでJSPSが実施している事業があります。海外特別研究員事業は、日本人の優れた若手研究者を海外の大学などの研究機関に2年間派遣して、研究に専念できるように支援する制度です。

もう1つが外国人特別研究員事業です。これは外国人の若手研究者の方を日本の大学等に招聘して、我が国の研究者と外国人若手研究者との研究協力関係を通じて国際化の進展を図っていく事業です。

また国際的な共同研究・交流の推進があります。戦略的国際協同研究プログラム(SICORP)は、相手国との省庁間での合意に基づき、対等な協力関係の下、多様な国際的な共同研究を推進するというもので、来年度から新たに共同ラボをつくることも始める上で、インド・ASEANといった新興国などと「顔の見える」持続的な協力を推進していくというものです。

その他に、地球規模課題対応国際科学技術プログラム(SATREPS)、日本・アジア青少年サイエンス交流事業等があります。

非常に雑駁ですが、人材育成と国際協力の関係で文部科学省の取り組みを説明させていただきました。ありがとうございました。

研究と家庭を両立させ、 国際的に活躍する 女性研究者たち

松下 祥子 氏

東京工業大学理工学研究科
材料工学専攻准教授



このたびは、このような素敵な記念式典にお呼びいただき、本当にありがとうございます。また、松前国際友好財団の素晴らしい建学の精神に大変感銘を受けました。

まず、自己紹介ですが、私は東京工業大学理工学研究科で材料系の准教授をさせていただいています。研究テーマはナノファブリケーションです。ボトムアップやトップダウン、どちらも行っています。また現在は、文部科学省のナノテクノロジー委員会も務めさせていただいています。

実際の応用分野は、近接場光学と電気化学、太陽電池などです。この研究では日本化学会コロイド界面化学部会で奨励賞を、また日本女性科学者の会においても奨励賞を受賞させていただきました。

私は1996年に東京大学で学部の方を卒業し、マスターはそのまま同じ研究室、光触媒で有名な藤嶋昭先生のところでした。そして、アメリカのペン・ステート・ユニバーシティで短期間研究をさせていただいたあとに、ドクターをとらせていただきました。

帰国後は、とある事情でとても有名になりました理化学研究所でポストドクをやらせていただき、その後、日本大学の文理学部で研究室を持たせていただきました。そうして准教授まで上がらせていただいて、現在の東京工業大学の准教授に至っています。

少し変わっているのが、東大のときは電気化学の研究室で、理化学研究所のときは高分子の研究室でした。日本大学では電磁気や相

対性理論などを教えており、今は無機材料の准教授です。どんな道でもありますよという若い方へのメッセージです。

私が結婚して出産したのは、日本大学で研究室を持っていたときです。おそらく少し想像がつかないかもしれませんが、研究室のスタッフが私1人だったので休めず、出産して2カ月で研究室に戻りました。赤ん坊はまだ首もすわっていない状況だったので、非常に大変な思いをしました。それ以来、こういったワークライフバランスの話をする機会を与えられましたら、なるべく断らないでやらせていただきたいと思います。出産後半年は休んだ方がいいです。

今回、「研究と家庭を両立させ、国際的に活躍する女性研究者たち」という非常に難しいタイトルだと思っています。研究と家庭の両立には家族と周囲の理解がないとまず難しい。子供がうまれると学会への参加がとても難しいときがあります。しかし、一方で国際的に活躍するとなると、学会への参加が必要な場合があり、これはとても矛盾したことだと思います。

それに対して、日本の我々女性がどうなっているのかということを生き残り度◎○△で表しました。

「生き残り度◎」は、家族構成が介護不要な大家族で住んでいる場合です。こちらは学会へも参加ができます。周囲への対応につい

ては、家族にとにかくお礼をすることです。この場合の批判は周囲から甘えている、いつまでも子供だと言われます。

次に「生き残り度○」なのが、家族構成が核家族、日本で核家族といった場合は、私と主人と子供だけのファミリーです。この場合、もし学会に不参加でも対応は学術論文を提出することで生き残れます。ただ、批判は学会活動に貢献していない、学会に出ないと研究をしていないと言われることがあります。少し変だと思うのですが、そういう批判をいただくこともあります。

「生き残り度△」は、核家族かつ学会にも参加する方です。こちらの対応は、家事を外注します。昔の貴族のようにです。日本では平日の晩御飯もヘルパーに頼んで、寝るときも家族と会わない方がいます。この場合の批判がおそらく一番つらく、母親失格だと言われます。女性にはとてもつらいことです。

そして「生き残り度○」、これは私がお会いしていないだけで、もしかしたら皆様のまわりにはいらっしゃるのかもしれませんが、この生き残っていないのが、核家族で学会に参加し家事も自分でやっていた場合です。私の同期たちは1人も生き残っていません。批判は受けなかったのですが、研究は嫌だと言って、私が知る人は皆やめていきました。

結局、個人的には、生き残っているのは自

身の優先順位は何かということを決めて、周囲にヘルパーでもいいですから、助けを求めることができる女性なのではないでしょうか。つまり、陰口はたたかれます。これはおそらく、男性の方でも必ず陰口は生きている限りどこかで受けますので、自分の価値観を確立すること。優先順位決定と価値観の確立の2つは、きっとグローバル人材に必須のメンタリティであると私は本当に思います。

例えば、松前国際友好財団の招聘研究者である、ブルガリアのアニフェさんと交流を持たせていただいているのですが、ブルガリアでは大学教員はほとんど女性だということです。なぜなら、とても給料が低いからだそうです。つまり置かれている状況や直面している問題は、まったく異なるということです。

皆さんも世界的に問題だと思っていると思うのですが、我々女性は今、アメリカ的な教育を受けるだけで殺される可能性がある、今はそういう時代になっています。また、これは我々女性だけではなく、女性の学生を持っている大学の先生方も同じ問題を突きつけられていると思っています。

グローバルといった場合には、いろいろな問題があるということ、その問題に対して、それぞれが考えていかなければいけない時代になっているのだと今、私としては考えています。以上です。



大学における研究室の 国際化の意義 ～環境工学分野を例に

中島 典之 氏

東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻
准教授



本日はこのような大変おめでたい場で、講演をさせていただきありがとうございます。先程来、松前国際友好財団の理念等を伺っていて、本当に共感する部分が多いと感じました。研究者はどうしてもオリジナリティーを求められるので、人と違うことを言わなければいけないというプレッシャーを常に感じているのですが、今日は同じ結論に行き着くことを楽しみたいと思っています。

私の自己紹介を今日の最初の話とのつながりで言うと、現在のTOKYO FMがFM東海からFM東京になった年に私は生まれました。デンマークというところも若干、共通しているかなと思います。私は在外研究でデンマークに8カ月ほどおりました。そこで学び、感じとったことが、公私共にずいぶん今に生きているなど思っており、そのような点でも財団の35周年のシンポジウムにかかわれたことを本当にうれしく思っています。

私の所属する学科名は都市工学ですが、お話の表題では環境工学にしました。そちらの方がわかりやすいかと思い、専門に近い名前にしました。都市から出る排水等が水環境に与える影響、特に生物に与える影響を研究テーマとしており、実験室内では水生生物を飼っています。私自身も泥をとりにいき、道路で掃除機を扱って路面の有害物質を採取したりして研究を行っています。研究の詳細はお話ししませんが、こういった研究分野にいるような学生にとって、国際化はどういう意味

があるのかが本日の主眼です。

本年度、私のところに財団で招聘された研究者が6カ月滞在しました。私の研究室のブログにも写真が出ています。大変アクティブな方で、研究室のミーティングでも、鋭い指摘をたくさんしてもらいました。もちろん彼女自身もいろいろなことを学んで帰ったと思うのですが、我々も非常に多くのことを学ばせてもらい、とても良い機会をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

学生にとって研究室が国際化するのはどういうことか。それは異なる文化・価値観・社会的地位・年齢の人と過ごすことだといえると思います。

外国人の研究者がいることのメリットとしては、英語に慣れることができる、というのが一番わかりやすいことです。日本でなかなか英語を使う機会がない中で、研究室に外国の方がいるのは非常に特別な機会です。しかし、これは表面的なことです。一番いいことは、考えが違う集団と折り合いをつけるスキルを磨けることだと思っています。人間関係でのトラブルをやりくりできる能力です。それを身につけられる非常にいい機会です。

もう1つの良い点は、知らないもの、無関係だと思っているものが1つ減る、ということではないでしょうか。ある国が今まで自分に関係のない国であったとして、その国の方

が来ることで途端に身近なものになり、それ以降おそらく無視できない存在になる、ということは、個人にとっても社会にとっても大きいことではないかなと思います。

私の学科の説明ですが、都市計画と環境工学という2つのコースからなる、都市の問題を扱う学科です。工学部なので、もちろん工学技術を学んで専門家になるのですが、どちらかというところ公務員やさまざまなプロジェクトの事務局など合意形成の調整役に就く人が多いようです。ですから、多様な集団での経験は非常に大事です。違う人を排除しないように話し合う能力を持った人を育てることが求められています。日本人だけではなく、また男女という違いだけでなく、違う背景を持った人、違う社会を経験した人と接するのは教育上とても重要な機会になります。

都市は世界各国にあり、それぞれに違う問題を抱えています。我々の学科の研究対象は世界中に広がっています。留学生も非常に多く、今年データでは22カ国から64人の大学院生、学部生がいます。私の研究室でいうと、常時ほぼ半分が外国人です。日常的にも学科内のメールは英語が先、日本語はあとという暗黙のルールがあります。

そのような教育環境では、もちろん研究への貢献も大きいですが、時にはそれ以上に多様なものの考え方を学ぶという点で、外国の方に来ていただくのはとても意義深いことです。

財団の招聘の応募条件では、「来日経験のない者」と、「確固たる地位・職業を持っていること」があげられています。他のスキームで来る方はだいたい学生ですから、この条件は実は非常に大きな違いです。財団で招聘される方は、まず日本をほとんど知らなくて、かつもう職業を持っているという意味で、他の学生より社会経験があり、年齢も上の方になります。少し『違う』人が来るというのは刺激的なことで、この半年間、私もそれを実感しました。今後もこういったスキームで、たくさん外国の研究者が研究室に来てくれればいいなと思いました。

最後にもう1点、本日前半のお話を聞いて思ったのは、もしかすると彼らの帰国後に、こちらから向こうへ行く旅費もサポートしていただけると、財団が構築してきた人的ネットワークをさらに発展できるかなと思いました。ご検討いただければと思います。

どうもありがとうございました。



2014年度 招聘研究者紹介

1：本国での勤務先 2：日本での受入研究機関・指導教官 3：研究テーマ (敬称略)



コンタッド・ウンナンカド (タイ)

Dr. Kontad OUNNUNKAD (Thailand)

- 1：チェンマイ大学 理学部化学科、講師
- 2：新潟大学 研究推進機構超域学術院 准教授 馬場 暁
- 3：電気化学-表面プラズモ共鳴法を用いたバイオマーカーの高感度検出



ナタリヤ・サリガ (ウクライナ)

Dr. Nataliya SALYHA (Ukraine)

- 1：ウクライナ農業科学アカデミー 動物生物学研究所、上席研究員
- 2：京都大学再生医科学研究所 再生統御学研究部門再生増殖制御学分野 教授 瀬原淳子
- 3：個々の一次赤芽球の運命を追う



モハメド・ネグム (エジプト)

Dr. Mohamed Walid Ahmed Abdelghany M. NEGM (Egypt)

- 1：アシュート大学 農学部病虫害防除学科、講師
- 2：京都大学 大学院農学研究科地域環境科学専攻生態情報開発学分野 教授 天野 洋
- 3：日本産天敵カブリダニ類の研究



アラム・アラファト・エルサイド・メガヘド (エジプト)

Dr. Allam Arafat El-Sayed MEGAHED (Egypt)

- 1：国立研究センター 農業・生物学研究部門植物病理学科、研究員
- 2：広島大学 大学院先端物質科学研究科分子生命機能科学専攻 教授 加藤純一
- 3：青枯病菌Ralstonia Solanacearumの植物感染における走化性の役割とその情報を活用した新規感染防除技術の開発



ヴィクトリア・アパンバン (ナイジェリア)

Dr. Victoria Omolara Enobong AKPAMBANG (Nigeria)

- 1：アクレ工科連邦大学 理学部化学科、上席講師
- 2：広島大学 大学院生物圏科学研究科総合科学部環境化学・環境分析化学研究室 教授 佐久川 弘
- 3：食品包装材に含まれる環境ホルモン物質による食品安全性評価に関する研究



マーティン・ドゥラハンスキー (チェコ)

Dr. Martin DRAHANSKY (Czech Republic)

- 1：ブルノ工科大学 情報技術学部、准教授
- 2：東京工業大学 大学院情報理工学研究科計算工学専攻 教授 篠田浩一
- 3：非接触型指紋認証システムのための手指の生体性検知

1: 本国での勤務先 2: 日本での受入研究機関・指導教官 3: 研究テーマ



マルガリータ・ミラノヴァ (ブルガリア)

Dr. Margarita Kirilova MILANOVA (Bulgaria)

- 1: ブルガリア科学アカデミー 一般無機化学研究所 高温酸化物材料研究室、研究員
- 2: 大阪府立大学 大学院工学研究科応用化学科無機化学研究グループ 教授 辰巳砂昌弘
- 3: $\text{Li}_2\text{O-V}_2\text{O}_5\text{-MeO}_x$, (Me=Mo, W, Cu) 系イオン伝導材料の合成と電気的特性



アミセル・アルミラル・ラ・セルナ (キューバ)

Dr. Amisel ALMIRALL LA SERNA (Cuba)

- 1: ハバナ大学 バイオマテリアルセンター セラミックス合成物科、研究員
- 2: 京都大学再生医科学研究所 生体組織工学研究部門生体材料学分野 教授 田畑泰彦
- 3: 軟骨再生医工学のための傾斜複合バイオマテリアルの作製



セイルホン・マトムラトフ (ウズベキスタン)

Dr. Seyilkhon MATMURATOV (Uzbekistan)

- 1: ウズベキスタン衛生省 肝胆道外科センター、上席研究員
- 2: 金沢医科大学 腫瘍内科学/集学的がん治療センター 教授 元雄良治
- 3: 膵発癌におけるスフィンゴ脂質の役割



イディオレイディス・アルバレス・ベッジョ (キューバ)

Dr. Idioleidy ALVAREZ BELLO (Cuba)

- 1: 国立農業科学研究所 植物病理・生化学科、研究員
- 2: 帯広畜産大学 食品科学研究部門機能科学分野 准教授 得字圭彦
- 3: オリゴガラクトロン酸がストレス条件下で植物の発達に与える影響



アフメッド・ムタナビ・アブドゥラ (イラク)

Dr. Ahmed Mutanabbi ABDULA (Iraq)

- 1: アル・ムスタンシリヤ大学 理学部化学科、有機化学講師
- 2: 名古屋市立大学 大学院薬学研究科創薬生命科学専攻医薬化学講座薬品合成化学分野 教授 中村精一
- 3: エキソ選択的なDiels-Alder反応によるスピロリドDシクロヘキセン環部の合成



ハミド・エルメリエ・マター・タジェルディン (スーダン)

Dr. Hamid EIMelaih MATTAR TAGELDIN (Sudan)

- 1: 国防省スーダン測量局 GIS地図作成部、マネージャー
- 2: 酪農学園大学 農食環境学群環境共生学類環境リモートセンシング研究室 教授 星野仏方
- 3: ポートスーダン及びサワキング沿岸におけるサンゴ礁と海草の保全に関する研究



ロベルト・アレハンドロ・レムス・モンダカ (チリ)

Dr. Roberto Alejandro LEMUS MONDACA (Chile)

- 1: セレナ大学 工学部食品工学科、研究員
- 2: 九州大学 大学院農学研究院食品製造工学研究室 教授 下田満哉
- 3: 超高压処理による機能性物質含浸食品の製造に関する研究

1 : 本国での勤務先 2 : 日本での受入研究機関・指導教官 3 : 研究テーマ



ホセ・ホアキン・ロデス・ロカ (スペイン)

Dr. Jose Joaquin RODES ROCA (Spain)

- 1 : アリカンテ大学 物理学システム工学信号理論学科、准教授
- 2 : (独) 理化学研究所 宇宙観測実験連携研究グループMAXIチーム 専任研究員 三原建弘
- 3 : 大質量X線連星の多衛星を用いた解析



カウサル・アブデラジズ・エルサイエド・モハメッド・ディアブ (エジプト)

Dr. Kawthar Abdelaziz Elsayed Mohamed DIAB (Egypt)

- 1 : 国立研究センター 遺伝子工学バイオテクノロジー部門遺伝細胞学部、研究員
- 2 : 東海大学 農学部バイオサイエンス学科食品生物科学系分野食品機能科学研究室 准教授 安田 伸
- 3 : 食品残渣と地域限定の可食性植物の健康有益性を企図した抗腫瘍研究



アフメド・アブデルサイエド・ファラグ・モハミド (エジプト)

Dr. Ahmed Abdelsayed FARAG MOHAMED (Egypt)

- 1 : エジプト石油研究所 石油アプリケーション科、研究員
- 2 : 北海道大学 工学部応用化学コース物質化学部門機能材料化学分野 教授 幅崎浩樹
- 3 : 金属材料の防食用導電性高分子/多孔質アノード酸化皮膜の複合膜に関する研究



グリセルダ・ヴァルデス・マガニャ (メキシコ)

Dr. Griselda VALDEZ MAGANA (Mexico)

- 1 : 動物生理学/遺伝的改良訓練研究ナショナル・センター、生理学研究員
- 2 : 岩手大学 農学部動物科学課程動物生殖工学研究室 准教授 澤井 健
- 3 : Tead-4発現抑制がブタ初期胚の発生におよぼす影響



クリスチャン・ザフュー (オーストリア)

Dr. Christian ZAFIU (Austria)

- 1 : ユーリッヒ研究センター (ドイツ連邦共和国)、研究員
- 2 : 東京工業大学 大学院総合理工学研究科物質電子化学専攻 教授 原 正彦
- 3 : 走査型プローブ顕微鏡による無細胞系合成膜タンパク質の相互作用力に関する研究



ダーリア・デル・カスティヨ・アポダカ (フィリピン)

Dr. Dahlia del Castillo APODACA (Philippines)

- 1 : フィリピン鉱山地球科学局 環境天然資源科、上席科学研究員
- 2 : 東京大学 大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授 中島典之
- 3 : 藻類および底生カイミジニコに対するニッケルの毒性に及ぼす水質特性の影響評価



チバライ・テミヤサチット (タイ)

Dr. Chivalai TEMIYASATHIT (Thailand)

- 1 : モンクット王工科大学ラートクラバン校 国際学部、講師
- 2 : 北海道大学 大学院情報科学研究科コンピュータサイエンス専攻情報認識学研究室 教授 工藤峰一
- 3 : デング熱ウイルス配列の不完全遺伝子分類

1：本国での勤務先 2：日本での受入研究機関・指導教官 3：研究テーマ



モハマドレザ・ナシリ (イラン)
Dr. Mohammadreza NASSIRI (Iran)

- 1：マシュハド・フェルドゥスィー大学 農学部動物科学科、バイオテクノロジー研究所、准教授
- 2：自然科学研究機構分子科学研究所 岡崎統合バイオサイエンスセンター 生命環境研究領域・生命分子研究部門 教授 加藤晃一
- 3：フコース非修飾抗体の産生細胞の確立と抗体抗原相互作用の構造基盤の解明



レミィ・ベルトラン・テポンノ (カメルーン)
Dr. Remy Bertrand TEPONNO (Cameroon)

- 1：チャン大学 理学部化学科環境応用化学講座、上席講師
- 2：九州大学 大学院薬学研究院医薬細胞生化学分野 准教授 宮本智文
- 3：カメルーン産薬用ドラセナ科植物の生物活性二次代謝産物に関する植物化学的研究



マルコ・ガイヨッティ (イタリア)
Dr. Marco GAIOTTI (Italy)

- 1：ジェノヴァ大学 工芸学部電気電子テレコミュニケーション・エンジニアリング造船工学科、研究員
- 2：大阪大学 大学院工学研究科地球総合工学専攻船舶海洋工学コース 教授 藤久保昌彦
- 3：複合材料構造部材および構造体の全体および局部動的不安定性に関する研究



研究滞在を終え帰国前に、本財団事務所に挨拶に来られた方々には、理事長からの修了証書がお渡しされます。





奨学者国内研修旅行



本財団が招聘する研究者の方には、国内研修旅行に参加することで、日本滞在中に各自の研究活動を行うだけでなく、日本の歴史、文化、自然、産業などについても深く理解していただいております。

2014年10月に実施された国内研修旅行には8カ国より9名の方が参加されました。



原爆ドーム前にて（広島）



広島平和記念公園にて各自で折った千羽鶴を捧げる奨学者



神戸・人と防災未来センターを訪問し、地震による液状化現象について模型を使った説明を受ける奨学者



神戸ポートタワー前にて



平等院鳳凰堂にて（京都・宇治）

石臼で抹茶づくりを体験
（福寿園宇治茶工房にて）赤膚焼給付け体験をする奨学者
（奈良・赤膚山元窯古瀬にて）

国内研修旅行に参加して

カウサル・アブデラジズ・エルサイエド・モハメッド・ディアブ（エジプト）

私はこの旅行に参加して、観光の面では京都の二条城が印象深かったのですが、特に神戸の「人と防災未来センター」を訪問して1995年1月17日に起こった阪神淡路大震災のことを知り、日本の生活において挫折を感じていた私のネガティブな気持ちをポジティブに変えさせてくれました。この地震がなんと多くの神戸のビルや都市構造を壊してしまったのでしょうか。人々はこの苦悩からどうやって生きのびたのでしょうか。しかし、この災害は日本の人々に精神的な力をもたらしました。人々は冷静にこのチャレンジを受け入れ、以前よりも、もっと良くなるようにと新しい神戸の街づくりを始めました。この神戸の復興を見て、私は大変勇気付けられました。それから10数年経ち、日本人はまた津波と福島第一原発の事故のような試練を与えられました。実際、日本人はそれぞれのチャレンジを与えられてから、強くなっているのだと感じました。

ダーリア・デル・カスティヨ・アボダカ（フィリピン）

松前財団の国内研修旅行は日本を訪れる私たち研究者にとって魅力的で価値のある文化的活動です。この旅行によって私たちは、日出ずる国、日本の美しさを垣間見ることができました。そしてこの旅行および東

京ミーティングによってフェロウシップという友情の本当の意味を読み取れた気がします。私たち、博士学位取得の研究者たちは、選ばれた研究分野によってスキルと知識をより強化するために、ここ日本へ来たのですが、さらに重要なことは私たち研究者同士および松前財団のスタッフとの間で発展した友情と親交であります。私たち一人ひとりの個性の違いにも順応することを学び、日本とその豊かな文化を知ることができ、皆と共に地方と都市生活両方を楽しみ、素晴らしい時間を持つ良い機会となりました。

初めて広島を訪れたことは私にとって新鮮で、この経験は私の今までの旅行とは明らかに違っていました。人類で初めてこの場所に原子爆弾が落とされてから69年が経ちますが、被爆写真と被爆遺物は、本当にそれが地球上に与えた大きく悲惨な影響をおよぼすことを明らかにしています。そして広島訪問のために松前財団事務局からいただいた折り紙で折り鶴（千羽鶴）をつくるのが何を象徴するかを考えながら、私は時間をみつけてなるべくたくさんさんの鶴を折り、捧げようと思いました。そして広島平和記念公園の記念碑「原爆の子の像」に、参加者の方々と共に折り鶴を捧げたことはとても意味深いこととなりました。私は永遠の世界平和のために日本人とこの願いを共有したいと思います。



◀◀ 創立35周年記念シンポジウムで招待講演をするために来日した奨学者3組のご夫婦が、本財団事務所を訪問し、松前重義博士のビデオドラマを鑑賞。



◀◀ 茶の湯体験へご招待
(ホテル椿山荘東京内の茶室「残月」にて)

法人会費・寄付金を以下の皆様よりいただきました。 深く感謝申し上げます。

(期間：2014年4月1日～2015年3月15日、敬称略、順不同)

法人会費

[群馬県]

株式会社ナカヨ

[東京都]

株式会社ジェー・シー・シー

株式会社東海教育研究所

医療法人社団 松和会

港北出版印刷株式会社

大成建設株式会社

横浜倉庫株式会社

秀和ビルメンテナンス株式会社

株式会社エフエム東京

[神奈川県]

東海教育産業株式会社

東海ウイング株式会社

[静岡県]

ヤマダユニア株式会社

鈴与建設株式会社

[福岡県]

岩崎建設株式会社

寄付金

[北海道]

大場 禮二

[茨城県]

田所 啓弘

武藤 忠行

[埼玉県]

長谷川 博之

[千葉県]

阿部 潔

[東京都]

横堀 禎二

加川 正彦

笠巻 孝嗣

吉田 守

吉野 賢三郎

金子 義明

堅谷 朝基

小松 はるの

小松 哲彰

松崎 松平

西郷 勝行

田辺 佐敏

淵上 貫之

木村 奈加代

有限会社四季の企画社

株式会社霞ヶ関東海倶楽部

[神奈川県]

宇佐美 彰朗

吉田 茂

吉本 旬志

橘 裕司

原 広子

原 誠治

荒井 準幸

今井 望

佐藤 美成

山内 正彌

柴田 忠作

秋山 賢二

松前 光紀

松本 輝

深水 一夫

杉下 道生

斉藤 潔

前田 正輝

曾我 喜三郎

多田 直人

竹口 真

帖佐 寛巳

渡部 重行

飯塚 進

尾郷 けい

平井 克己

片瀬 敏行

堀口 雅巳

木村 豊

柳沢 真一

鈴木 章司

鈴野 君枝

和田 弘

脇 靖男

佛崎 光利

[石川県]

高田 剛

[静岡県]

岡田 喜裕

五十嵐 正晃

福島 甫

[京都府]

志岐 常正

[大阪府]

梶野 郁子

野村 公寿

[兵庫県]

森 昌彦

[島根県]

宮永 龍一

前田 泰生

藤間 恵一

[長崎県]

林 邦昭

[熊本県]

大原 淳

ご寄付に対する税制上の 優遇措置のご案内

公益財団法人松前国際友好財団に対して寄付金（法人会員の場合は会費）のご協力をいただくと、次の税制上の優遇措置が受けられます。

個人の場合（所得税）

個人が公益財団法人松前国際友好財団に支出した金額は、特定寄付金に該当し寄付金控除が受けられます。（例）寄付金額が5,000円の場合は、2,000円を控除して3,000円が寄付金控除額となります。

法人の場合

公益財団法人に対する損金算入限度額は通常の寄付金の損金算入限度額と同額以上が別枠として損金算入することが認められています。

※その他、詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

本財団へのご寄付について

寄付金：個人・法人、金額に制限はありません。

法人会費：法人会員へのご加入につきましては、本財団までご連絡ください。

法人年会費 一口10万円から

振込方法：ゆうちょ銀行でお振り込みください。

口座番号：00100-4-49831

加入者名：公益財団法人 松前国際友好財団

本財団が用意いたしました「払込取扱票」をご利用いただいた場合、振込手数料は本財団が負担いたします。この「払込取扱票」については、本財団までご請求ください。

研究奨励金制度について

招聘期間：3カ月～6カ月

応募締め切り：招聘する年度の前年8月31日

◎応募者の資格

外国国籍を有しかつ次の事項に該当する者は、必要書類を添えて応募することができる。

1. 博士課程を修了した者、またはそれに準ずると本財団がみなした者。
2. 応募時の年齢が49歳以下であること。
3. 英語または日本語の会話能力が、研究活動に支障を来さない者。
4. 来日経験のない者。
5. 応募者は、応募者自身の国において確固たる地位・職業を持ち、招聘後は本国に戻る者。
6. 心身ともに健康な者。

◎研究分野

自然科学・工学・医学の研究分野は優先度が高い。

◎招聘期間および招聘予定数

各年度4月より3月迄の間で、滞在を希望する長さは応募者が、3カ月以上6カ月以内の間で決めて応募できる。各年度の招聘者数は約20名。

◎日本における研究機関

受け入れ研究機関については、国内のあらゆる大学の研究室、国公立研究機関、さらには各企業の研究所など、受諾可能な研究機関を自由に選択することができる。

◎研究奨励金の内容

研究滞在費……研究機関への指導料および研究に係わる経費・宿泊費・食費・交通費等の諸経費として支給。

旅行者保険……傷害死亡、後遺症、傷害治療、疾病死亡、疾病治療。

旅費……招聘者の母国居住地から東京間の最短経路のエコノミークラス・往復航空券を支給。

来日一時金……来日時の国内旅費補助、滞在開始時の宿泊施設確保に要する経費の補助等として支給。

※詳しくは「募集要項」をご覧ください。

お問い合わせは：

公益財団法人 松前国際友好財団

〒167-0043 東京都杉並区上荻4-14-46

TEL：03-3301-7600 FAX：03-3301-7601

URL：<http://www.mars.dti.ne.jp/mif>

E-mail：contact2mif@mist.dti.ne.jp

本財団の活動にご理解とご協力をお願いいたします

1979年（昭和54年）松前重義博士の呼び掛けにより設立された松前国際友好財団は、人種、性別、宗教、思想を問わず、優れた学術的資質を備えた外国人研究者に対し日本での研究活動の機会を提供し、結果、日本の学術発展に寄与するとともに国際友好親善に貢献することを、その目的としております。設立以来、本財団は多くの方の善意によるご寄付により支えられ、国からの公的資金や特定の機関・企業・団体など外部からの補助金、交付金、また事業活動による収入等を一切得ることなく今日まで活動を続けております。

今後も、これと同様皆様のご支援とご理解をいただきながら、活動を続けてまいります。本財団へのご理解とご協力のほどお願い申し上げます。